

慢性肝疾患における肺炎球菌感染症とワクチンの有用性

堤 武也

慢性肝疾患とりわけ肝硬変のある患者では、肝硬変関連免疫機能不全を背景として肺炎球菌感染症をはじめとする細菌感染症の発症リスクが高いことが報告されている。肺炎球菌ワクチンの免疫原性は健常者と比較すると慢性肝疾患患者では低下する場合があるものの、多くの症例で防御抗体の獲得が認められ、重症感染症や死亡率の低下が期待されることから、国際的なガイドラインでは接種が推奨されている。慢性肝疾患患者において肺炎球菌ワクチンは重要な予防戦略の一つであり、積極的な接種勧奨が必要であり、特に代償性肝硬変を含む早期段階での接種が重要と考えられる。